

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2004 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	心理学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学部・教授		押見輝男 印		
自然・人文の別	自然	・ 人文	個人・共同の別	個人	・ 共同 名
研究課題	自己開示における被開示者の聞き上手さを規定する要因				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・心理学専攻 博士課程後期課程 1 年		宮崎貴子 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・心理学専攻・ 博士課程後期課程 1 年		宮崎 貴子		
研究期間	2004 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

自己開示の受け手である被開示者の機能に焦点を当てた研究は少なく、聞き上手さのプロセスや、規定因を究明する必要がある。そこで、聞き上手であると評価される被開示者の具体的姿を把握するため、開示者がどのような情報に基づき被開示者の聞き上手さを判断しているのかに関し検討した。結果、聞き上手さの判断を規定する行動項目を抽出した。ところで、近年、自己開示に関連する新たな研究領域の発展も見られる。そこで、自己開示および関連領域における被開示者の機能に関し論考した。結論として、開示者、被開示者のコラボレーション過程について検討することは、聞き上手さを規定する要因研究においても重要であると考えられる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[自己開示] [被開示者] [聞き上手さ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

自分自身のことを他者に語ることを、社会心理学では自己開示 (self-disclosure) という。自己開示とは“特定の他者に対して、言語を介して誠実に伝達される、自分自身に関する情報、およびその伝達行為” (宮崎, 2004) と定義される。自己開示は、社会心理学の領域では自己 (self) の研究として位置づけられる。自己を現象的過程 (phenomenal process) として捉えた中村 (1990) の自己過程 (self-process) において、自己開示は、自己の姿を他者との社会的相互作用の過程で他者に示す段階である“自己の姿の表出”の位相に位置づけられている。

自己開示は中村 (1990) の位置づけで示唆されているように、社会的場面で起こる、開示者、被開示者の相互作用であるにも関わらず、自己開示の受け手である被開示者の機能、役割に焦点を当てた研究は少ない。さらに、被開示者に関する重要な研究課題として、聞き上手さのプロセスの解明、および聞き上手さを規定する要因を究明することが挙げられる。従来の被開示者に関する研究は、オープナー (opener; Miller, Berg, & Archer, 1983) と他のパーソナリティ特性との関連性について検討したものがほとんどである。このアプローチでは聞き上手であると評価、判断される被開示行動の具体的姿を把握することは難しいと言える。また、聞き上手さのプロセスの推測を可能とし、聞き上手さを規定する状況要因の発見につながるような研究を行う必要があると考えられる。

以上のことから、宮崎 (2004a) では、自己開示場面において、開示者がどのような情報に基づき被開示者の聞き上手さを判断しているのか、オープナーが具体的な被開示行動とどのように関連するのかについて検討した。さらに、オープナー特性が具体的な被開示行動とどのように関連するのかについて、あわせて検討した。結果より、被開示者の真剣さは被開示行動全般に対する評価と、開示内容への興味は開示内容の深刻度への理解に対する評価と関連していると考えられる。また、開示者をくつろがせることは、時間、場所の確保や聞くことに専念する姿勢に関する評価と、開示者に対する素直さ、同情は、被開示者の受容的行動に関する評価と関連すると言える。一方で、被開示者が自身の意見を述べることは、聞き上手さを抑制する方向にも作用することが示唆された。本研究で得られた聞き上手さの判断を規定する行動に基づき、実験室における開示場面で被開示行動を評価し、行動項目の妥当性を検討する必要があると言える。

また、宮崎 (2004b) では、聞き上手さに関係する変数として、“以後に予定があるために時間を意識すること”である時間的切迫感を取り上げた。被開示者の時間的切迫感は、相互作用場面に心理的緊張を生起させ開示者の自己開示を抑制すると考えられる。また、被開示者が時間的切迫感を持つことは、開示者の話を聞くことに気持ちを集中することを妨げると推測され、聞き上手さを抑制するのではないかと考えられる。この時間的切迫感が聞き上手さにおよぼす効果について検討した結果、聞き上手さは、被開示者の時間的切迫感という内的な注意散漫状態によって抑制されるのではなく、実際の物理的時間が確保された状態から生じる時間的余裕により促進されることが例証された。さらに、開示者による開示の内容を被開示者が自身に関連付けて捉えることが、時間的余裕とは関係なく聞き上手さを促進することが示された。今後は、実験室における相互作用場面において実際に被開示者の時間的切迫感を強く喚起させるよう操作を行い、検討する必要があると言える。

ところで、近年では、従来の自己開示研究と対照をなす、Pennebaker, J.W.らによる筆記 (writing) 開示パラダイム (e.g., Pennebaker, 1985, 1997) や、自己物語 (self-narrative) といった自己開示に関連する新たな研究領域の発展も見られる。そこで、宮崎 (2005a) では、初期の自己開示研究から現在に至るまで、および自己開示に関連する新たな研究領域における被開示者の機能について論考した。

Jourard, S.M.による初期の自己開示研究においては、開示者の自己開示傾向を、被開示者の社会的役割に沿って検討されてきた。したがって、被開示者の実際の被開示行動は重視されておらず、被開示者が誰であるのかに関わらず、開示者の自己開放の程度が問題とされてきた。しかし、被開示者の社会的役割によって、開示者の開示に違いが見られたこ

研究成果の概要 つづき

とから、被開示者の要因に関心が向き、以降の、被開示者の要因も含めた自己開示の状況因に関する研究へと展開されてきた。

自己開示を促進する被開示者側の側面への関心は、社会心理学の領域におけるオープナー研究が中心であったと言える。オープナー研究では、自己開示を促進する被開示者のパーソナリティ特性が重要視された。オープナーのパーソナリティ特性は、聞き手としての受動的態度であると位置づけることができる。一方で、オープナーの、開示者に対する能動的な言語行動に関する検討もなされているが、どのようにして開示者の自己開示を促進するのかという、被開示者の聞き上手さのプロセス、および、聞き上手さを規定する要因に関する検討が不十分であると言える。

また、従来の自己開示研究と好対照をなす研究領域として、Pennebaker, J.W.らのトラウマ筆記開示パラダイム、および自己物語研究を取り上げた。筆記開示は、一見、被開示者を必要としないように見受けられるが、筆記の際に参加者が他者を想定しているかどうかについて、厳密な統制はなされていない。したがって、筆記開示の効果そのものは、被開示者の効果を分離して検討する必要があると言える。また、自己物語研究においては、聞き手は単に話し手の話を受動的に聞くだけでなく、話し手のナラティブの創造に能動的に関わり、コミュニケーションを促進する機能を有するとみなされた。しかし、聞き手の積極性が自己開示そのものを変質させる危険性について検討する必要があると言える。

以上の宮崎(2005a)の論考および宮崎(2004b)で得られた知見、示唆に関し、宮崎(2005b)では、他者との関わりにおける自己開示という観点から再考察を行った。

これらのことから、自己開示研究において、被開示者が果たす機能、役割については、未だ十分な検討がなされているとは言えず、自己開示研究の本来の目的をふまえた方向性をもった研究を行うことが望まれる。つまり、開示者がより快適に、より誠実に開示できる被開示行動について検討する必要があると考えられる。今後は、この方面の分析を通して、自己開示、およびその関連領域における被開示者の機能に関し、更なる知見を得ることができよう。